



東京女子医科大学病院

病院案内

平成30年度版（2018～2019）

患者さんの視点に立った
安心で最良の医療を提供します。





CONTENTS

基本理念・基本方針・「5S」の精神	4	診療部門紹介	9
沿革	5	外来案内	25
概況	6	病棟案内	26
病院組織図	8	構内見取図	27

基本理念

患者視点に立って、安全・安心な医療の実践と高度・先進な医療を提供する。

基本方針

- 1 誠実な慈しむ心（至誠と愛）をもって、患者視点に立った、きめ細やかで温かい心の通った医療を実践します。
- 2 先進医療の推進や高度医療の提供に尽力し、質の高い安全な医療を提供します。
- 3 医療連携をとおして地域医療により一層貢献します。
- 4 明日を担う人間性豊かな医療人の育成を目指し、充実したカリキュラムや実践的な研修プログラムを実施します。
- 5 本学の特性を活かして女性医療人を育成し、働く環境を創出します。

「5S」の精神



沿革

明治

明治 33 年 (1900 年) 12 月	東京女醫学校創設 (5 日 : 創立記念日)
明治 37 年 (1904 年) 7 月	私立東京女醫学校設立認可
明治 37 年 (1904 年) 9 月	東京至誠医院設置
明治 41 年 (1908 年) 12 月	附属病院開設許可
明治 45 年 (1912 年) 3 月	私立東京女子医学専門学校設立認可

大正

昭和

昭和 5 年 (1930 年) 12 月	附属病院竣工
昭和 11 年 (1936 年) 10 月	第二病棟竣工
昭和 27 年 (1952 年) 4 月	新制東京女子医科大学発足
昭和 30 年 (1955 年) 5 月	附属日本心臓血圧研究所 (のち心臓病センターと改称) 設置
昭和 40 年 (1965 年) 4 月	附属日本心臓血圧研究所 (のち心臓病センターと改称) 竣工
昭和 40 年 (1965 年) 4 月	附属消化器病・早期がんセンター (のち消化器病センターと改称) 設置
昭和 42 年 (1967 年) 10 月	神経精神科病棟竣工
昭和 42 年 (1967 年) 12 月	附属消化器病センター竣工
昭和 46 年 (1971 年) 10 月	附属脳神経センター竣工
昭和 50 年 (1975 年) 7 月	糖尿病センター設置
昭和 53 年 (1978 年) 3 月	中央病棟竣工
昭和 54 年 (1979 年) 4 月	腎臓病総合医療センター設置
昭和 55 年 (1980 年) 7 月	東病棟竣工
昭和 59 年 (1984 年) 4 月	内分泌疾患総合医療センター設置
昭和 59 年 (1984 年) 9 月	母子総合医療センター設置
昭和 62 年 (1987 年) 3 月	糖尿病センター竣工

平成

平成元年 (1989 年) 4 月	救命救急センター設置
平成 2 年 (1990 年) 10 月	呼吸器センター設置
平成 15 年 (2003 年) 3 月	総合外来センター竣工
平成 21 年 (2009 年) 12 月	第 1 病棟竣工
平成 28 年 (2016 年) 9 月	教育・研究棟竣工



概況

平成 30 年 1 月現在

* 内容は、適宜更新します。最新の情報は、病院のホームページをご覧ください。http://www.twmu.ac.jp/into-twmu/

開設者

学校法人 東京女子医科大学

病院長

田邊 一成

副院長

新浪 博 (診療部門担当：外科系)
 川名 正敏 (診療部門担当：内科系・臨床研修教育部門)
 飯田 知弘 (診療支援部門担当)
 坂井 修二 (管理部門担当)
 世川 修 (医療安全・患者サービス部門担当)
 野村 実 (医療安全部門担当)
 白石 和子 (看護部門担当)

看護部長

白石 和子

薬剤部長

木村 利美

事務長

飯田 真由美

許可病床数

1,379 床 (一般：1,314 床 精神：65 床)

職員数

(平成 30 年 1 月現在)

医師	893 名
看護師	1,167 名
その他	816 名
合計	2,876 名

患者数

(1 日平均)

	外来患者数	入院患者数
平成 27 年	3,648 人	1,073 人
平成 28 年	3,552 人	990 人
平成 29 年	3,596 人	958 人

機能

- 救急告示病院
- 公害医療機関
- 臨床研修指定病院
- 臨床修練指定病院
- 災害拠点病院
- エイズ治療拠点病院
- 神経難病医療拠点病院
- 治験拠点医療機関
- 肝臓専門医療機関
- 移植認定施設(心臓・小児心臓・腎臓・脾臓・肝臓・骨髄・骨髄・末梢血幹細胞)
- 東京都脳卒中急性期医療機関
- 総合周産期母子医療センター
- 東京 DMAT 指定病院
- 東京都小児がん診療病院
- 東京都難病診療連携拠点病院

保険医療機関承認

平成 24 年 10 月 1 日～平成 30 年 9 月 30 日

先進医療 (承認)

樹状細胞及び腫瘍抗原ペプチドを用いたがんワクチン療法 [食道がん、胃がん、肝臓がん(転移性含む)、膵臓がん、胆道がん]



施設基準の承認

平成 30 年 8 月現在

< 当基本診療料の施設基準等に係る届出 >

- 歯科点数表の初診料の注 1 に規定する施設基準
- 歯科診療特別対応連携加算
- 超急性期脳卒中加算
- 看護職員夜間配置加算(16 対 1)
- 重症者等療養環境特別加算
- 精神科リハビリテーション加算
- 感染防止対策加算 1
- 褥瘡ハイリスク患者ケア加算
- 呼吸ケアチーム加算
- 入退院支援加算 2
- 救命救急入院料 2
- 総合周産期特定集中治療室管理料
- 小児入院医療管理料 1・4
- 地域歯科診療支援病院歯科初診料
- 一般病棟入院基本料(7 対 1)
- 診療録管理体制加算 2
- 看護補助加算 2
- 無菌治療室管理加算 1・2
- 栄養サポートチーム加算
- 抗菌薬適正使用支援加算
- ハイリスク妊婦管理加算
- 後発医薬品使用体制加算 3
- 精神疾患診療体制加算
- 特定集中治療室管理料 1・3
- 新生児治療回復室入院医療管理料
- 歯科外来診療環境体制加算 2
- 精神病棟入院基本料(13 対 1)
- 急性期看護補助体制加算 2(50 対 1)
- 療養環境加算
- 精神科身体合併症管理加算
- 医療安全対策加算 1
- 患者サポート体制充実加算
- ハイリスク分娩管理加算
- データ提出加算 2
- 地域歯科診療支援病院入院加算
- ハイケアユニット入院医療管理料 1
- 小児入院医療管理料 1

< 特掲診療料の施設基準等に係る届出 >

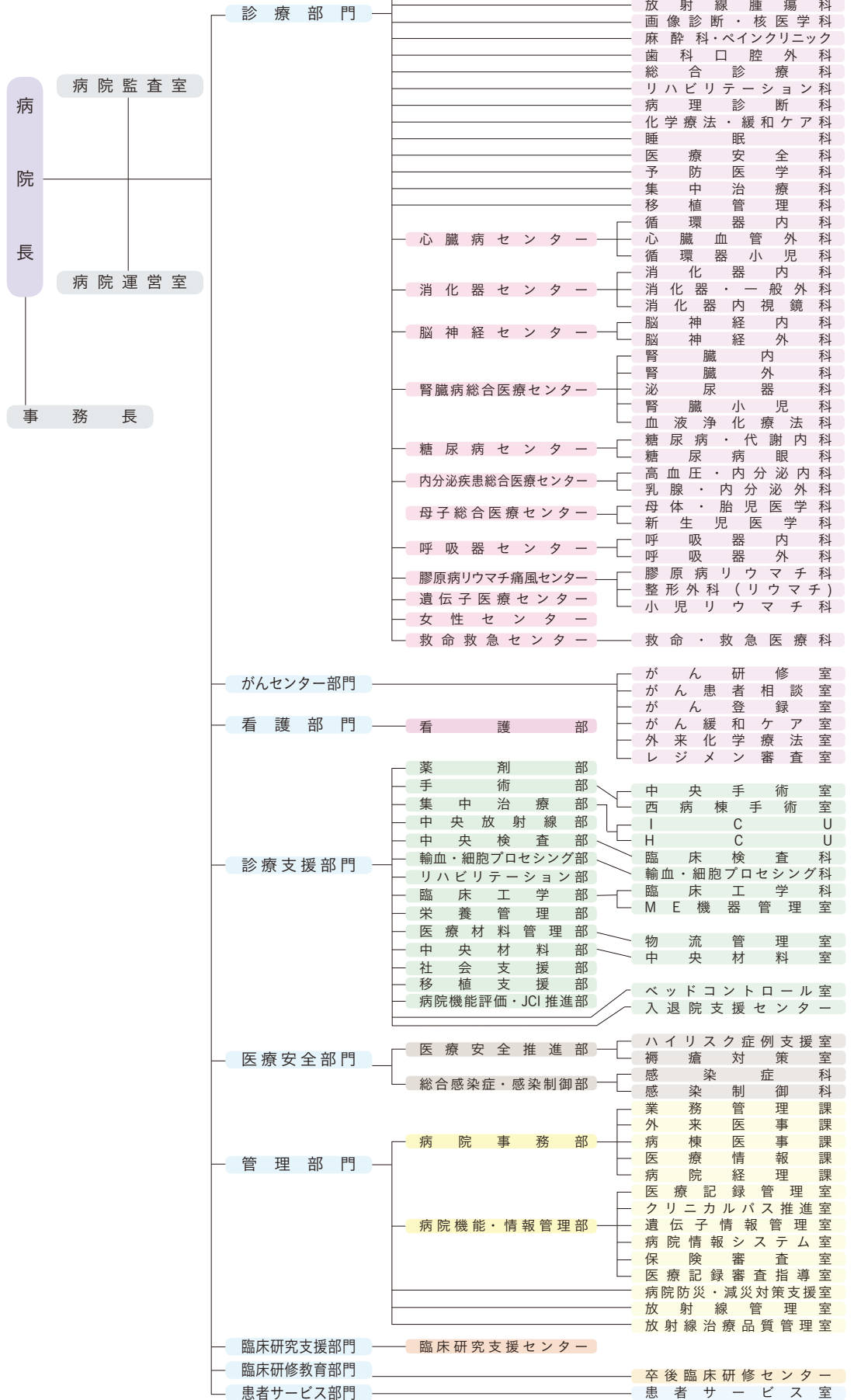
- ウイルス疾患指導料
- 糖尿病合併症管理料
- がん性疼痛緩和指導管理料
- がん患者指導管理料 1・2・3
- 移植後患者指導管理料
- 糖尿病透析予防指導管理料
- 乳腺炎重症化予防ケア・指導料
- 院内トリアージ実施料
- 外来放射線照射診療料
- ニコチン依存症管理料
- 薬剤管理指導料
- 医療機器安全管理料 1・2
- 医療機器安全管理料(歯科)
- 総合医療管理加算(歯科疾患管理料)
- 歯科治療時医療管理料
- 在宅植込型補助人工心臓(非拍動流型)指導管理料
- 在宅腫瘍治療電場療法指導管理料
- 在宅経肛門的自己洗腸指導管理料
- 持続血糖測定器加算
- 遺伝学的検査
- 抗 HLA 抗体(スクリーニング検査)及び抗 HLA 抗体(抗体特異性同定検査)
- HPV 核酸検出及び HPV 核酸検出(簡易ジェノタイプ判定)
- 検体検査管理加算(Ⅰ)
- 検体検査管理加算(Ⅳ)
- 国際標準検査管理加算
- 遺伝カウンセリング加算
- 心臓カテーテル法による諸検査の血管内視鏡検査加算
- 時間内歩行試験及びシャトルウォーキングテスト
- 胎児心エコー法
- ヘッドアップティルト試験
- 人工腎臓検査
- 皮下連続式グルコース測定
- 長期継続頭蓋内脳液検査
- 神経学的検査
- 補聴器適合検査
- ロービジョン検査判断料
- コンタクトレンズ検査料 1
- 小児食物アレルギー負荷検査
- 内服・点滴誘発試験
- センチネルリンパ節生検(片側)
- 精密触覚機能検査
- 画像診断管理加算 1
- ポジトロン断層撮影又はポジトロン断層・コンピュータ断層複合撮影
- CT 撮影及び MRI 撮影
- 冠動脈 CT 撮影加算
- 心臓 MRI 撮影加算
- 抗悪性腫瘍剤処方管理加算
- 外来化学療法加算 1
- 無菌製剤処理料
- 心大血管疾患リハビリテーション料 1
- 脳血管疾患等リハビリテーション料 1
- 運動器リハビリテーション料 1
- 呼吸器リハビリテーション料 1
- がん患者リハビリテーション料
- リンパ浮腫複合的治療料
- 歯科口腔リハビリテーション料 2
- 精神科作業療法
- 抗精神病特定薬剤治療指導管理料(治療抵抗性統合失調症治療指導管理料に限る。)
- 医療保護入院等診療料
- エタノールの局所注入(甲状腺に対するもの)
- エタノールの局所注入(副甲状腺に対するもの)
- 人工腎臓 1
- 下肢末梢動脈疾患指導管理加算
- 人工腎臓療法
- 手術用顕微鏡加算
- 口腔粘膜処置
- 歯肉無痛の高洞形成加算
- CAD/CAM 冠
- 有床義歯修理及び有床義歯内面適合法の歯科技工加算
- 皮膚悪性腫瘍切除術(悪性黒色腫センチネルリンパ節加算を算定する場合に限る。)
- 皮膚移植術(死体)
- 組織拡張器による再建手術(一連につき)(乳房(再建手術)の場合に限る。)
- 骨移植術(軟骨移植術を含む。)(自家培養軟骨移植術に限る。)
- 後縦靭帯骨化症手術(前方進入によるもの)
- 脳腫瘍覚醒下マッピング加算
- 原発性悪性脳腫瘍光線力学療法加算
- 頭蓋骨形成手術(骨移動を伴うものに限る。)
- 脳刺激装置植込術(頭蓋内電極植込術を含む。)
- 及び脳刺激装置交換術脊髄刺激装置植込術及び脊髄刺激装置交換術
- 緑内障手術(緑内障治療用インプラント挿入術(プレートのあるもの))
- 緑内障手術(水晶体再建術併用眼内ドレーン挿入術)
- 網膜付着組織を含む硝子体切除術(眼内内視鏡を用いるもの)
- 網膜再建術
- 内視鏡下鼻・副鼻腔手術 V 型(拡大副鼻腔手術)
- 上顎骨形成術(骨移動を伴う場合に限る。)(歯科診療に係るものに限る。)、下顎骨形成術(骨移動を伴う場合に限る。)(歯科診療に係るものに限る。)
- 乳腺悪性腫瘍手術(乳がんセンチネルリンパ節加算 1 及び乳がんセンチネルリンパ節加算 2 を算定する場合に限る。)
- ゲル充填人工乳房を用いた乳房再建術(乳房切除後)
- 胸腔鏡下縦隔悪性腫瘍手術及び胸腔鏡下良性縦隔腫瘍手術(内視鏡手術用支援機器を用いる場合)
- 胸腔鏡下肺悪性腫瘍手術(肺葉切除又は 1 肺葉を越えるもので、内視鏡手術用支援機器を用いる場合)
- 食道縫合術(穿孔、損傷)(内視鏡によるもの)、内視鏡下胃・十二指腸穿孔瘻孔 閉鎖術、胃瘻閉鎖術(内視鏡によるもの)、小腸瘻閉鎖術(内視鏡によるもの)、結腸瘻閉鎖術(内視鏡によるもの)、腎(腎盂)腸瘻閉鎖術(内視鏡によるもの)、尿管腸瘻閉鎖術、(内視鏡によるもの)、膀胱腸瘻閉鎖術(内視鏡によるもの)、及び腸腸瘻閉鎖術(内視鏡によるもの)
- 経皮的冠動脈形成術(特殊カテーテルによるもの)
- 経カテーテル大動脈弁置換術
- 経皮的僧帽弁クリップ術
- 磁気ナビゲーション加算
- 経皮的中等心筋焼灼術
- ベースメーカー移植術及びベースメーカー交換術
- 両心室ペースメーカー移植術及び両心室ペースメーカー交換術
- 植込型除細動器移植術、植込型除細動器交換術及び経静脈電極除去術
- 両室ペースキング機能付き植込型除細動器移植術及び両室ペースキング機能付き植込型除細動器交換術
- 大動脈バルーンパンピング法(IABP 法)
- 経皮的循環補助法(ポンプカテーテルを用いたもの)
- 補助人工心臓
- 小児補助人工心臓
- 植込型補助人工心臓(非拍動流型) ● 同種心移植術
- 骨格筋由来細胞シート心表面移植術
- バルーン閉塞下経静脈の塞栓術
- 胆管悪性腫瘍手術(膵頭十二指腸切除及び肝切除(葉以上)を伴うものに限る。)
- 体外衝撃波胆石破砕術
- 腹腔鏡下肝切除術
- 生体部分肝移植術
- 同種死体肝移植術
- 腹腔鏡下脾腫瘍摘出術及び腹腔鏡下脾尾部腫瘍切除術
- 同種死体脾移植術、同種死体脾腎移植術
- 早期悪性腫瘍大腸粘膜下層剝離術
- 腹腔鏡下直腸切除・切断術(内視鏡手術用支援機器を用いる場合)
- 体外衝撃波腎・尿管結石破砕術
- 腹腔鏡下腎悪性腫瘍手術(内視鏡手術用支援機器を用いるもの)
- 同種死体腎移植術
- 生体腎移植術
- 膀胱水圧拡張術
- 腹腔鏡下膀胱悪性腫瘍手術 ● 腹腔鏡下前立腺悪性腫瘍手術
- 腹腔鏡下前立腺悪性腫瘍手術(内視鏡手術用支援機器を用いるもの)
- 腹腔鏡下子宮悪性腫瘍手術(子宮体がんに限る。)
- 胃瘻造設術(内視鏡下胃瘻造設術、腹腔鏡下胃瘻造設術を含む。)
- 輸血管理料 1
- 貯血式自己血輸血管理体制加算
- 自己生体組織接着剤作成術
- 人工肛門・人工膀胱造設術前処置加算
- 歯周組織再生誘導手術
- 手術時歯面レーザー応用加算
- 広範囲顎骨支持型装置埋入手術
- 歯根端切除術の注 3
- レーザー機器加算の施設基準
- 麻酔管理料 1・II
- 放射線治療専任加算
- 外来放射線治療加算
- 高エネルギー放射線治療
- 1 回線量増加加算
- 強度変調放射線治療(I M R T)
- 画像誘導放射線治療加算(I G R T)
- 体外照射呼吸性移動対策加算
- 定位放射線治療
- 定位放射線治療呼吸性移動対策加算
- 画像誘導密封小線源治療加算
- 保険医療機関間の連携による病理診断
- 病理診断管理加算 2
- 悪性腫瘍病理組織標本加算
- クラウン・ブリッジ維持管理料
- 歯科矯正診断料
- 顎口腔機能診断料(顎変形症(顎関節等の手術を必要とするものに限る。))の手術前後における歯科矯正に係るもの)

< 入院時食事療養の届出 >

入院時食事療養(Ⅰ)及び特別管理の届出を行っており管理栄養士の管理のもと、適時・適温(夕食は午後 6 時以降の配膳)及び選択メニュー(1 日 2 食以上の複数の献立から好みの食事を選択するもので、特別な自己負担無し)の食事療養を提供しています。

病院組織図

平成 30 年 5 月現在



診療部門紹介

血液内科 Department of Hematology

血液内科では、急性ならびに慢性白血病、骨髄異形成症候群、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫、多血症などの骨髄増殖性疾患、溶血性貧血、再生不良性貧血をはじめとする種々の貧血、特発性血小板減少性紫斑病など幅広い血液疾患の診療にあたっています。移植治療に関しては、白血病には血縁者間造血幹細胞移植ならびに骨髄バンクや臍帯血バンクを介した造血細胞移植や臍帯血移植を、悪性リンパ腫や多発性骨髄腫には主に自家末梢血幹細胞移植を精力的に行っております。外来では常時2～4人の血液内科専門医が診療できる体制をとっております。大学病院という特色を生かし、幅広い領域の血液疾患について、他科と連携しながら個々の患者に対し最良な医療の提供を目指しております。さらに難治性疾患に対する新規治療法や臨床治験による最先端治療法の導入に積極的に取り組んでおります。日本血液学会研修施設、日本骨髄バンク認定施設、日本造血細胞移植学会認定移植施設であり、血液腫瘍を含むがん診療全般に関する種々の業務・支援体制が確立しております。

神経精神科 Department of Psychiatry

心の病は国民の健康を脅かす5大疾病のひとつであり、統合失調症、双極性障害、うつ病、不安障害、器質性精神障害などが含まれます。神経精神科は閉鎖病棟を有し、難治性疾患を含む、これら多様な精神障害に対する治療を行っています。治療のゴールを病気からの回復と社会参加の促進に置き、現代の精神科医療が到達した最も標準的でバランスの取れた医療の提供を目指しています。具体的にはエビデンスに基づく薬物療法、個別性を重視した心理療法、心理教育、精神科リハビリテーション等からなる包括的なアプローチです。チーム医療を重視し、医師、看護師、臨床心理士、作業療法士、薬剤師、精神保健福祉士からなるスタッフが協働して日々の診療にあたっています。また、高度医療を担う大学病院という特性上、コンサルテーション・リエゾンにも力を入れており、がんをはじめとしたさまざまな病気で治療中の患者さんに対して、心のケアを行っています。この活動は精神科リエゾン・チームが中心となって、各診療科と連携して進めています。

小児科 Department of Pediatrics

小児科は、初診時の年齢が主に15歳未満の内科疾患全般を対象とし、全身を診ることができる数少ない診療科の一つです。「子どもは常に成長・発達している」ということが、おとなとの最も大きな違いであることから、常に子どもの成長発達過程に留意した診療を心がけています。外来診療は、原則として、午前中が主に一般外来、午後は、神経、アレルギー、発育・発達、内分泌、児童精神、血液・腫瘍、栄養・消化器などの専門外来としています。但し、緊急性のある疾患については、予約外、時間外来にも積極的な対応を心がけています。このところ急増している子どもの心の問題には、小児専門の臨床心理士による心理外来を毎日行い、必要に応じて児童精神科医の対応も行っています。大学病院として、遺伝子診断、細胞治療などの先端医療を推進する一方、循環器小児科、腎臓小児科、新生児科、小児外科、脳外科小児グループなど小児専門各分野と連携して包括的診療体制を展開しています。

小児外科 Department of Pediatric Surgery

小児は成人のミニチュアではなく、小児医療は高い専門性をもった領域です。小児外科診療科は、都内でも有数の日本小児外科学会の認定施設であり、年間250例以上の小児外科手術を行っています。対象疾患は、出生直後の新生児期から学童期(15歳未満)までの頭頸部・呼吸器・消化器・泌尿生殖器・内分泌臓器・小児腫瘍など、小児にみられる外科的疾患を広い範囲で取り扱っております。15歳以上であっても、先天性疾患の場合は小児外科で対応可能です。先天性の疾患だけでなく、外傷や生後発現する疾患も同様に小児外科指導医・専門医が治療をいたします。特に、日本内視鏡外科学会技術認定取得医(小児外科領域)による腹腔鏡・胸腔鏡を用いた小児内視鏡手術や、消化器内視鏡診断・治療には20年以上の実績があり、新生児も含めた多くの疾患に対する診断・治療が低侵襲に行われています。また、小児科、腎臓小児科、循環器小児科、母子総合医療センター新生児部門、脳神経外科(小児グループ)とともに小児総合医療センターが設立されており、院内小児関連各科との密接な協力体制のもと、同センターにおける外科部門の中心的役割を担っています。

整形外科 Department of Orthopedic Surgery

手足、体幹に痛みや機能障害をもたらす骨関節、筋肉、神経などの運動器疾患を治療します。これらの疾患は人口の高齢化に伴い増加し、QOL(クオリティ・オブ・ライフ)の低下を招きます。腰痛や関節痛によって、歩くこと、スポーツやレジャーを楽しむこと、労働することなどに不自由を感じている方は増え続けています。整形外科は全身の運動器すべてを扱うため、当科では膝関節、股関節、脊椎、肩肘関節、手の外科、足の外科、骨粗鬆症、関節リウマチ、骨軟部腫瘍などの各分野にエキスパートの医師を要しており、一般的な疾患はもちろん、難治疾患などにも対応しています。例えば変形性関節症に対する人工関節置換術や骨切り術、半月板や靭帯損傷に対する関節鏡視下手術、脊椎変性疾患に対する徐圧矯正固定術、脊椎内視鏡手術、肩関節疾患に対する関節鏡視下手術や人工関節置換術、上肢の外傷や神経軟部疾患に対する手術、リウマチによる手足変形の手術などを多数行っています。専門外来の受診には混雑が予想されますのでお近くの医療機関からの紹介状をお持ちいただければスムーズな診療が可能です。紹介状なしでも診察いたします。

形成外科 Department of Plastic and Reconstructive Surgery

形成外科とは、体表外科ともいわれるほど体の表面すべてに携わる外科です。口唇、口蓋裂、指趾の変形（多指（趾）・合指（趾）症）漏斗胸などの先天異常の治療や、種々の「あざ」や「しみ」に対するレーザー治療、指切断に対するマイクロサージャリーを用いた再接着術、乳房再建などがん切除後の再建術、そして重症から軽症までのやけどの治療を行っています。ケガによるキズやキズ跡をきれいにするために、最新の医療技術にも取り組んでいます。最近では瞼（まぶた）のたるみや下垂を治したりする、いわゆる「若返り治療」も盛んに行われております。

皮膚科 Department of Dermatology

皮膚科では第3土曜日を除く月曜日から土曜日まで、午前中はあらゆる皮膚疾患（湿疹、水虫、いぼ、皮膚がんなど）の初診および再診患者さんを診察しています。午後はパッチテスト、乾癬、蕁麻疹、膠原病、アトピー性皮膚炎、ニキビ、レーザー治療（しみ、あざ、ほくろ）、小手術（ほくろ、小腫瘍）などの診察を行う専門外来を開設しています。そのほか、皮膚生検（皮膚病の一部を小さく切除して組織検査を行うこと）の必要な場合は、火曜日と木曜日の午後に行っています。専門外来の受診や皮膚生検は、一度午前中の一般外来を受診していただいてから、予約をお取りする形で行っています。初診はなるべく紹介状を持参して頂きたいと思いますが、紹介状なしでも診察いたします。難治な皮膚病からニキビやシミなどの美容的な問題まで広く診察しており、また常に最先端の治療薬剤・技術の導入を心がけています。ナローバンド UVB 照射装置を用いた光線療法も行っています。

産婦人科 Department of Obstetrics and Gynecology

産婦人科では各ライフステージにおける女性のトータルケアとしてのウイメンズヘルスを目指しています。年々増加傾向にある婦人科悪性腫瘍では診断から治療までを一貫として行い、初診後1ヶ月以内の治療開始を可能な限り実践しています。内分泌/不妊領域では、合併症を持った患者さんの体外受精や原発性無月経患者さんの診断・治療、女性医学部門では、生活の質を向上させる更年期/老年期治療や子宮筋腫・卵巣嚢腫など良性腫瘍の腔式あるいは腹腔鏡を使った低侵襲手術、周産期領域では総合周産期センターである特性を活かした合併症妊娠の管理・分娩さらに母体搬送などを積極的に受け入れています。これら4つの分野を柱に各々専門医による特殊外来を設置し、各部門とも他科と密接な連携を取り、合併症を有する患者さんにも安心して女子医大ならではの診察が受けられるよう努力しております。なお当科の周産期部門は母子総合医療センター母性部門ですので、同センターをご参照ください。

眼科 Department of Ophthalmology

患者さん一人一人により良い視機能（クオリティ・オブ・ヴィジョン：QOV）を提供できるように、当科では個々の患者さん毎に最も適した眼科診察を行っています。外来診察では一般眼科診察の他に、黄斑・網膜・硝子体、角膜、ドライアイ、緑内障、ぶどう膜炎、神経眼科、斜視弱視、未熟児小児眼科、色覚などの各専門分野で、最先端の診断機器と治療装置を備えて、特徴ある治療で実績を積み重ねています。特に、失明につながる加齢黄斑変性などの黄斑疾患の治療に力を入れており、「黄斑疾患総合ケアユニット」で専門性の高い診察を総合的に行ってまいります。また、網膜剥離や黄斑疾患などの網膜硝子体疾患をはじめ、白内障、緑内障などに対して、より良い視力回復を目指して、最新の手術機械をそろえて、最先端の手術を積極的に行っています。

耳鼻咽喉科 Department of Otolaryngology

耳鼻咽喉科では鎖骨から上で脳と眼球を除く頭頸部の範囲を扱います。耳と鼻、咽喉（のど）の病気に加えて、聴覚、平衡覚、嗅覚、味覚という感覚器の疾患、顔面神経麻痺、咽喉頭の疾患、摂食・嚥下や発声の問題、唾液腺疾患そして頭頸部領域に発生する腫瘍の診断と治療を行っています。

中耳疾患に対する鼓室形成術やアブミ骨手術など、鼻副鼻腔疾患に対する内視鏡下鼻内手術を多数行っています。喘息合併のよくみられる好酸球性中耳炎や好酸球性副鼻腔炎は、当院呼吸器センターと協力して気道全体のトータルケアを行い、手術を含めた治療成績が向上しています。先進的医療としては、唾石の治療としてsialendoscopy（唾液腺内視鏡）に取り組んでいます。他に専門外来として、アレルギー、小児難聴、補聴、口腔乾燥・味覚外来、頭頸部腫瘍外来があり、QOL（クオリティ・オブ・ライフ）の改善を重視した最善の治療を目指しています。

放射線腫瘍科 Department of Radiation Oncology

放射線腫瘍科は年間約 700 人の悪性腫瘍患者さんの放射線治療を行っています。対象疾患は乳がん、脳腫瘍、前立腺がん、肺がん、直腸がん、食道がん、膀胱がん、子宮頸がん、頭頸部腫瘍、悪性リンパ腫など多岐にわたっています。保有する治療機器は外部照射用高精度リニアック 3 台（コーンビーム CT つき 2 台）、腔内／組織内照射用イリジウムリモートアフターローディングシステム 1 台で、X 線撮影と CT 一体型位置決め装置 1 台と多数の治療計画装置が導入されています。

高精度放射線治療としては、肺腫瘍や肝腫瘍に対する定位放射線治療、脳腫瘍、前立腺がん、食道がん、肺がん、膀胱がん、頭頸部腫瘍、直腸がん、子宮頸がんなどに対する強度変調放射線治療、画像誘導放射線治療を積極的に実施しています。当科の特徴は、神経膠腫、小児脳腫瘍に対する放射線治療の患者数が日本で最多の施設であること、前立腺がんに対して強度変調放射線治療ならびに放射性ヨウ素の永久挿入法を実施できること、乳がんに対する寡分割法などの多様な選択肢を用意していること、粒子線治療のコンサルタントができること、医学物理士による治療の品質管理をシステム化して行っており、安心して治療を受けられることです。

画像診断・核医学科 Department of Diagnostic Imaging and Nuclear Medicine

画像診断・核医学科は、従来の放射線科業務の 3 本柱である、画像診断、核医学、放射線治療の中の、画像診断と核医学を受け持つ診療科です。画像診断では、単純 X 線撮影、マンモグラフィー、CT、MRI の読影や、超音波や血管撮影の検査および診断を行っています。また、CT や超音波検査を用いた細胞診や組織診と腫瘍ドレナージに加え、血管内治療などのインターベンショナルラジオロジー（IVR）も担当しています。核医学では、昔から広く行われている骨シンチ、ガリウムシンチなどの一般核医学から、SPECT による心臓や脳神経の機能診断、PET を用いた分子イメージングを担当しています。さらに放射性同位元素（RI）を用いた治療では、ヨード（I-131）によるパセドウ病や甲状腺がんの治療、ストロンチウム（Sr-89）によるがん骨転移の疼痛治療、塩化ラジウム（Ra-223）による骨転移治療、ゼパリン（Y-90）による悪性リンパ腫の治療を、各診療科と連携して行っています。以上のような業務に対し、診療放射線技師や看護師とも連携し、チーム医療を実践し、専門性が高くかつ安全な医療の実現に努めております。

麻酔科・ペインクリニック Department of Anesthesiology

病気の中には、手術を受けて治療をすることが必要な場合があります。その時に、どうしても手術の際の「痛み」を取り除く必要があります。現在の麻酔科は、「痛み」に加えて手術によって身体に加わるストレスを全て取り除く技術と知識を駆使して患者さんに最もよい状況で手術を受けてもらえるように対応する科です。たとえば心筋梗塞後で胃の手術を受ける場合にも、その心臓合併症に影響が最小限になるように、全身管理を麻酔科が提供致します。人口の高齢化と共に、手術をする臓器、部位以外に様々な余病をお持ちの患者さんが増えてきています。手術中にその余病の臓器がどうなるのか？そんな心配は、麻酔科の周術期外来にお越しください。患者さん個人の状況に合わせて対応致します。

麻酔科では、これら手術中の急性痛に対する全身麻酔・全身管理ばかりではなく、ペインクリニックではヘルペス後、神経痛をはじめとした慢性疼痛治療を行っております。

歯科口腔外科 Department of Oral and Maxillofacial Surgery

歯科口腔外科では歯、口、顎骨の疾患の診断と治療を行っています。心臓病、糖尿病、腎臓病、血液疾患などの患者さんの抜歯などは院内他科と連携し行っています。特にワーファリンなどの抗凝固薬、アスピリンなどの抗血小板薬による経口抗血栓療法中の患者さんの抜歯は薬を中止することなく行っています。また安全のため入院して抜歯することもあります。親知らず（智歯）の抜歯や歯根のう胞の摘出手術などは外来で口腔外科専門医が安全に行います。顎関節症、歯や口の中の外傷、顎の骨折、歯が原因の炎症、口や顎の腫瘍、口腔がんの診断と治療を専門医が行います。口腔がんの治療は形成外科、放射線腫瘍科、化学療法・緩和ケア科など院内各科と連携をとって治療にあたっています。歯科矯正は矯正歯科専門医が行っており顎の変形などは手術を併用して治療いたします。歯科インプラント（人工歯根）による治療も行っています。また当院睡眠科と連携し睡眠時無呼吸症の治療のための口腔内装置の作成を行っています。

総合診療科 Department of General Medicine

「どの診療科に行ったらよいかわからない」「症状はあるのに診断がついていない」「健康診断で異常を指摘されたが、どこに行けばいいかわからない」「たくさんの病気がからみあっているようだ」「社会・心理的なマネージメントも必要」…など、総合診療科はこのような方（年齢15歳以上）のいろいろなご相談を伺い、それぞれ専門性を持ったスタッフが初期治療を行う当院の入り口です。

特に最近では、特定の臓器や疾患に限定することなく幅広い視野で診てほしいとの患者さんからのニーズが高まっており、複数の問題を抱える患者さんにとっては、総合的な診療能力を有する医師による診療が適切な場合が多くなっています。

当科では、詳細な病歴を伺う医療面接と身体診察から患者さんごとの問題点を探り出し、適切な検査を行って診断・治療を進める工程を、診療グループ全体で行っております。院内専門診療科とは密に連携しながら、軽症から重症まで診療しており、多くの場合は数回の診療で診断から治療を終了いたしますが、診断結果によっては入院治療や専門診療科での診療を継続して頂くこともあります。

ご自身の健康のことで何かお困りの際には、まずは当科を受診していただければと思います。

リハビリテーション科 Department of Rehabilitation Medicine

各科からの依頼により、入院患者と外来患者さんに対して病気やケガにより生じた障害の治療を行っています。リハビリテーション科医、理学療法士（PT）、作業療法士（OT）、言語聴覚士（ST）のチーム医療で、機能障害や能力低下をできるだけ軽減し、患者さんが元の生活にできるだけ近い形で復帰できるように依頼科とも連絡をとりながら進めています。リハビリテーション科医師による診察・障害の評価の後、理学療法（筋力強化、基本動作訓練、歩行訓練など）、作業療法（上肢の機能訓練、日常生活動作訓練、認知機能訓練など）、言語療法、嚥下訓練などの治療、生活指導、家族への介助指導などを行っています。当院の特徴は急性期の患者さんに対してICUやベッドサイドよりリハビリテーションを開始していることです。また、神経や骨関節の病気だけでなく、循環器や呼吸器、がんなど多種にわたる病気に対して治療しています。重症の患者さんも多いため、リハビリテーション中のリスク管理には特に注意を払っています。

病理診断科 Department of Sueginal Pathology

病理診断科は以下の業務を通じ、女子医大病院の医療に貢献しています。

1. 組織診断：生検または手術によって採取される組織を肉眼および組織学的に検討し、診断を行います。年約13,000件。一部の症例では最適化・個別化医療のため、症例ごとに分子標的治療の適否を検討しています（コンパニオン診断）。
 2. 細胞診断：喀痰、尿、甲状腺や乳腺腫瘍などから採取される細胞を検討し、疾患の推定診断を行います。年約8,000件。
 3. 術中迅速診断：手術中に採取された組織や細胞から標本作製、検体提出後15-20分のうちに診断を行います。年約1,000件。
 4. 各診療科との症例検討会や研修医教育プログラムへの参画（特に全学臨床病理症例検討会の運営）。
- これらの業務を通じ、病理専門医、細胞診専門医、細胞診断士を育成します。また臨床病理学的研究を推進し、各診療科や初期研修医、学生からの学会、論文発表などの学術的発信を支援しています。

化学療法・緩和ケア科 Department of Chemotherapy and Palliative Care

化学療法・緩和ケア科は、がんや肉腫など、あらゆる悪性腫瘍の患者さんを対象とし、化学療法（抗がん剤治療）や症状緩和治療、緩和ケアを行う科です。積極的ながん治療と緩和ケアの両方を専門とし、同時に実践しております。ひとつの臓器のみを対象とする診療科とは異なり、がんや肉腫、重複がんや原発不明がんなどのまれな疾患にも対応し、最新の知見に基づいた抗がん治療を積極的に行っております。標準治療はもちろん、合併症のある患者さんなど、個々の患者さんの特性に合わせて、抗がん治療の効果を最大限に得られるよう、副作用を最小限に抑えるよう常に配慮して治療を進めていきます。また、緩和ケアは末期の患者さんだけの治療ではありません。症状緩和治療、緩和ケアを早期に始めて、がんによる身体的・精神的な苦痛を可能な限り軽くしながら、同時に積極的な抗がん治療を行うことが現代のがん治療のスタンダードです。病気が進行してしまった患者さんに対して、根治や病勢を抑えることを目指す治療ができなくなったとしても、その状態から患者さんのために何ができるのか、患者さんが何を治療の目標とするのかを共に考え、道しるべとなるように、他科の医師や看護師、薬剤師、ソーシャルワーカー、地域の医療スタッフなどとチームで対応していきます。

睡眠科 Division of Comprehensive Sleep Medicine

当科の前身は、東京女子医大附属青山病院睡眠総合診療センターで、2010年より睡眠時無呼吸症候群を中心とした睡眠呼吸障害、むずむず脚症候群、レム睡眠行動障害、ナルコレプシーなどの過眠症、不眠症などの睡眠障害の検査、診断、治療を行ってまいりました。

近年、24時間社会、IT化がすすみ、また食の欧米化、運動不足などライフスタイルの変化により、不眠、睡眠覚醒概日リズム障害、睡眠時無呼吸症候群などの睡眠障害をきたす患者さんが増えています。睡眠障害は、事故やヒューマンエラーなど社会的問題、うつなどの気分障害、生活習慣病と密接に関係し、総合的、専門的に診断、治療していくことが重要です。当科では、睡眠医療、循環器内科、精神科の専門医が診療にあたり、歯科口腔外科、耳鼻科、神経内科、呼吸器内科など多数の診療科と連携をとりあっています。入院検査では、終夜睡眠ポリグラフィー検査(PSG)、昼間の眠気を客観的に評価、検査するMSLT(反復睡眠潜時検査)を施行いたします。閉塞性睡眠時無呼吸症候群では、持続陽圧呼吸(CPAP)の導入、定期通院や歯科口腔外科での口腔内装置による治療を行っています。睡眠に関する悩みがあればお気軽にご相談ください。毎日初診を受けておりますが、完全予約制になっておりますので、初診・再診ともに当院予約センターまでご連絡ください。睡眠検査入院をご希望の場合も、まず初診外来で承ります。

予防医学科 Department of Preventive Medicine

東京女子医科大学附属青山病院からTotal Health Care部門が移転し、予防医学科が開設されました。

当科では大学病院附属施設でこそ可能な、最新の医学的根拠に基づいた手法を最大限に活用した健診を実践し、疾病予防、健康増進を図ることを目標としております。また、数値のみでの判断ではなく、全人的な背景を十分加味した健診結果報告とともに生活習慣をも含む健康上の最良の助言を提供し、健診結果に基づいたきめ細かい生活指導の実践に努めております。また、受診者の立場に立った、附属病院内の多く領域の専門医との密な連携も行っております。健診には、様々なコースとオプションを含む多数の項目を用意しております。詳細はお問い合わせください。

集中治療科 Department of Intensive Care Medicine

集中治療科は多彩な病態をしめす重症患者さんに、安全に最善の高度集学的医療を提供可能にするため平成29年度に新設されました。病棟再編成にあわせて18床の集中治療室(ICU)と15床の高度治療室(HCU)での治療をサポートします。当院で行われる侵襲の大きな手術をうける患者さんや複雑な既往・合併症を有する患者さんの手術後管理、また治療中に併発した重篤な病態(重症肺炎、敗血症などの重症臓器障害)の患者さんの治療を行っています。非常に複雑な重症病態の治療となりますので、ICU・HCUでは多くの医療従事者がその治療に関わります。日々変化する患者さんの病態を、毎朝行う多職種カンファレンス(医師、看護師、薬剤師、理学療法士、臨床工学部、栄養管理部、他のスタッフ)で検討し、治療計画を決定しております。関係する多くの医療従事者と連携して、その中心になって高度集学的治療を行っています。

移植管理科 Department of Organ Transplant Medicine

東京女子医科大学病院は、心臓、腎臓、肝臓、膵臓、膵腎同時、肝腎同時の臓器移植を行うことのできる本邦では数少ない多臓器移植施行病院として日本臓器移植ネットワークに登録されており社会的にも非常に重要な役割を担っています。また、生体腎移植や生体部分肝移植のような生体ドナーからの移植数においても全国有数の症例数を誇っており本邦における移植医療を担う中核的な施設となっています。

これまでは室長(兼任)以下、各専門分野の移植コーディネーター4名およびドナーコーディネーター1名が各診療科に分散している形で運営されてきました。今後は臓器横断的に以下のような業務を移植管理科が中心になって取り組んでまいりたいと考えております。

- ①移植待機患者(日本臓器移植ネットワーク)の管理
- ②臓器移植患者のデータ報告
- ③移植前後における臓器移植検討会の開催
- ④普及啓発に関する業務(日本臓器移植ネットワークとの連携)
- ⑤臓器移植に関係する免疫学的検査の質の担保

心臓病センター The Heart Institute

循環器内科 Department of Cardiology

虚血性心疾患、不整脈、心筋症、心不全、弁膜症および大血管疾患など、循環器疾患に対する最先端の診断・治療を行っています。1967年にわが国で最初に創設された冠動脈集中治療室（CCU）では、現在は虚血性心疾患の治療にとどまらず、心臓移植を視野にいれた重症心不全の治療に精力的に取り組んでいます。心筋梗塞や狭心症に対する最先端の心臓カテーテル治療に加え、下肢を中心とした全身の血管に対してのカテーテル治療も積極的に行っており、全体での症例数は700例を超えています。不整脈領域では、頻脈性不整脈に対するカテーテルアブレーションは年間約400例、また心臓ペースメーカー・植込み型除細動器（ICD）・重症心不全に対する心臓再同期療法機能付植込み型除細動器を用いた治療も総計で約300例を数えます。冠動脈疾患、不整脈、心不全、弁膜症、大血管疾患、人工弁、先天性心疾患などの専門外来と併せて、常に日本で最高の医療を提供することを目指して、患者のための全人的医療に取り組んでいます。

心臓血管外科 Department of Cardiovascular Surgery

当科は1955年に開設された本邦で最も歴史があり、最大級の診療科です。症例数においては2016年までに心臓大血管手術数が通算37,000例を超えました。当科では虚血性心疾患、大血管疾患、弁膜症、不整脈、重症心不全先天性心疾患、オフポンプバイパス術や小切開弁形成術も積極的に行っております。各領域に高度な技術と経験を有する専門医を揃え、内科、小児科、麻酔科医師、臨床工学技師、看護師と密接に連携し、良質で安全なチーム医療に取り組んでいます。当科は心臓移植認定施設、植込み型補助人工心臓認定施設であり、その他自己組織による再生医療、弓部大動脈瘤の低侵襲ステントグラフト治療などの高度先進心臓血管外科治療も多数実施しています。外来は専門外来が整備され、手術に際しては十分なインフォームドコンセントを行い、セカンドオピニオンにも積極的に対応しています。

循環器小児科 Department of Pediatric Cardiology

胎児、新生児、小児から成人までの先天性心疾患に対する最先端の診断、治療を行っています。その診断、治療レベルは日本で最高のもとなっております。小児の不整脈、成人の遺伝性不整脈、小児の心筋疾患、川崎病、肺高血圧症に対する最先端の診断、治療も行っています。胎児の心臓検診（胎児診断）や心疾患のある母胎の診療も行っています。また小児と成人に対するカテーテル治療の数と治療成績は日本でも有数の施設のひとつとなっております。小児の不整脈や先天性心疾患に合併した小児や成人の不整脈に対するカテーテルアブレーションも日本で最高の成績をあげています。心臓血管外科や循環器内科と密接に連携して、高度な、しかも安全な医療を提供しています。未熟児で先天性心疾患がある場合には、母子総合医療センター新生児部門（NICU）と協力して治療を行います。先天性心疾患成人で、妊娠されたご婦人の場合も母子総合医療センター母性部門と協力して、妊娠と分娩について最良の医療を提供します。外来は予約制を整備し、常に患者サービスの向上に努めています。

消化器病センター Institute of Gastroenterology

消化器内科 Department of Medicine

消化器内科は、食道、胃、十二指腸、小腸、大腸、肝臓、胆嚢、膵臓のすべての消化器疾患の内科診療を担当しています。消化器疾患の予防、診断、治療などの内科診療とともに、病気の成因や病態の解明のための基礎的な研究から新しい診断法や治療法の開発などの研究まで幅広く取り組んでいます。診療チームは食道・胃・十二指腸・小腸（上部消化管）、大腸、肝、胆・膵と大きく4つに分かれ、それぞれの分野の専門医がチームとなって患者さんの診療にあたっています。いずれの診療チームにも経験豊富な学会専門家が多数そろっております。最近では、胃がん、肝臓がんなどの悪性疾患も内科的治療が可能となりました。胆石治療や胃潰瘍出血なども内視鏡治療が主役です。これらの治療にあたる当科医師は、常に最新の技術を習得したトップレベルの医師達です。劇症肝炎、重症急性膵炎などの重篤な病気の治療経験も豊富で、多くの患者さんを救命しています。肝移植の適応検討も行っています。治療の選択肢が増えた現在、当科では個々の患者さんに応じたオーダーメイド治療を提供しています。

消化器・一般外科 Department of Surgery

消化器病センター外科では、臓器別グループにて診療がなされており、症例数、切除成績とも日本のトップレベルです。消化管グループは、食道外科、胃外科、下部消化管グループがあり、診断から治療まで一貫して担当しております。食道外科では、放射線腫瘍科と協力のもと、化学放射線治療も行っております。また、最近では、内視鏡的粘膜切除や腹腔鏡補助下胃切除や結腸切除の症例数が増加してきており、患者さんにあった低侵襲の治療が選択されています。肝胆膵外科グループでは、高難度の手術が数多く行われております。最近では術後の合併症も少なくなり、高難度手術も安全に施行できるようになりました。また、化学療法や免疫治療の専門家が外科医とともに働いていることで、術後の補助療法や、再発例・切除困難例に対しても積極的な治療が行われています。心臓や腎臓など他臓器に障害があり、他病院では手術困難な症例に対しても、慎重に全身状態を評価のうえ安全に手術が行われています。これは、他診療科、麻酔科、看護師も含めた女子医大病院の総合力の高さのためと思われれます。患者さんの病態に応じた総合治療を行うことができることが消化器病センター外科の特徴です。

消化器内視鏡科 Department of Endoscopy

消化器病センター消化器内視鏡科は、診療支援部門として消化器内視鏡検査による診断と治療とともに中央検査部内視鏡室の運営を行っています。消化器内科、外科の医師と連携し、内視鏡室として、上部消化管（食道・胃・十二指腸）内視鏡検査は年間 9,000 例、大腸内視鏡検査は 5,000 件、内視鏡的胆道膵管造影検査（ERCP）500 例ほか、小腸内視鏡検査（カプセル内視鏡を含む）や超音波内視鏡検査も多数行っています。治療内視鏡はポリープや早期がんの内視鏡的切除術、食道胃静脈瘤の硬化療法や結紮術、総胆管結石の採石術などを中心に年間約 1,500 例の実績があります。当院の症例数は国内有数であり、画像強調観察などの最新機器を導入し、迅速で正確な診断を行い、病態に応じた適切な治療を選択しています。特に重症例や治療困難例の紹介患者さんも多く、各分野の専門家が、その経験を生かし診療に従事しています。また、内科、外科およびメディカルスタッフと連携し、チーム医療を推進し、安全で質の高い内視鏡診療をモットーに診療にあたっております。

脳神経センター Neurological Institute

脳神経内科 Department of Neurology

脳神経内科は脳、脊髄、末梢神経、筋肉の病気を対象としています。症状としては頭痛、めまい、しびれ、歩行障害、ふるえ、物忘れ、言語障害、意識障害などがあり、主な病気には脳卒中、パーキンソン病、アルツハイマー病、てんかん、片頭痛、多発性硬化症、筋萎縮性側索硬化症、末梢神経障害、筋炎、脳炎、髄膜炎、脊髄炎などがあります。女子医大の神経内科は全国の大学病院の中でも最も多くのスタッフが最も多くの患者さんを診療しており、神経内科専門医と脳卒中専門医の数は全国有数を誇っています。脳卒中、神経心理、神経免疫、神経生理、末梢神経筋疾患などの研究グループは全国でもトップクラスの研究成果と診療実績を誇っており、特定の分野に片寄らない、オールラウンドな診療を特徴としています。多くの大規模臨床試験で主導的な役割を果たしており、診断や治療が困難な神経疾患について多くの紹介があり、先進的な検査や治療に取り組んでおり、さらなる診療成績の向上を目指しています。

脳神経外科 Department of Neurosurgery

脳神経外科では最先端の診断治療機器と治療方法を導入し、全国有数の症例数の治療を行っています。小児から高齢者、脳腫瘍、脳血管障害、脳機能疾患、小児脳神経外科、ガンマナイフ、血管内治療などの広い領域で診療しています。各専門分野は非常に充実しており迅速な対応と適格な治療を推進しています。脳腫瘍に対しては手術室に MRI を導入し手術の進展とともに MRI 検査を行い、機能温存を図りながら最大限の摘出を行っています。また脳動脈瘤、閉塞性脳血管疾患などに対しても血行再建術（Low flow bypass, High flow bypass, CEA など）に独自の手術手技を導入し良好な結果を得ています。特にややや病に対しては新たなバイパス手術も開発しています。良性脳腫瘍に対しても術中モニタリングを駆使した摘出術による安全で確実な治療を実現しています。機能外科においてはジストニア、パーキンソン病などに対し最先端治療を進めています。ガンマナイフ治療では難治性疼痛、脳機能障害、てんかんなどにも応用を図っています。

研究に関しては先端生命医科学研究所や基礎教室などとの連携を図り、再生医療、脳虚血の病態解明、悪性脳腫瘍の病態解明、良性脳腫瘍の境界領域の病理組織学的検討、各疾患の遺伝子的解明などを行っています。

腎臓病総合医療センター Kidney Center

腎臓内科 Department of Medicine

当科は『患者さんとともに』を基本として日々の診療に励んでおります。診療内容は主に腎炎、ネフローゼ症候群、腎不全などの腎疾患全般および膠原病や高血圧症の診断・治療です。腎生検を積極的に施工し、治療方針の決定を行っています。また、血液透析、CAPD（持続腹膜透析）を含めた透析全般にわたる診療を担当しています。透析施設との病診連携を重視し、慢性腎臓病の合併症の評価と治療方針の決定に協力しています。遺伝性疾患として多発性嚢胞腎の専門外来を開設し、遺伝相談を行い、新規治療を紹介しています。その他、体液・水・電解質の異常にかかわる患者さんも診察しています。最近では、腎移植ドナーおよび移植後の腎障害の診断・治療も行っております。セカンドオピニオン外来を開設し、治療方針の決定が困難なケースにも対応しています。

腎臓外科 Department of Surgery

当科は第一に「患者さん本位の医療」を心がけております。主な診療内容は、1) 腎臓、肝臓、膵臓などの臓器不全に対する臓器移植、2) 血液透析に必要なバスキュラー・アクセス手術、腹膜透析に必要なペリトネアル・アクセス手術、バスキュラー・アクセスに対する経皮的血管形成術(PTA)、3) 末期腎不全患者さんにおける副甲状腺機能亢進症や消化器外科的疾患に対する外科的治療、4) 血液浄化療法、5) その他の一般外科です。腎移植は年間100例前後、バスキュラー・アクセス手術は年間700例前後、経皮的血管形成術(PTA)も年間800例前後、また膵移植(主に膵腎同時移植)は年間5～8例施行しています。さらに肝移植もこれまで90例以上を経験しています。特に生体腎移植は、ドナー様に低侵襲で安全な鏡視下腎摘術を1,000例以上施行し、レシピエントさんにも最新の免疫抑制療法を駆使し、血液型が違ったり白血球の相性が悪いケースにおいても良好な成績をおさめております。いずれの領域でも最高の医療が提供できますよう日夜研鑽に励んでおります。

泌尿器科 Department of Urology

当科は腎移植を主体とした腎不全治療、腎臓がん・前立腺がん(前立腺腫瘍センター)、膀胱がんなどの泌尿器科腫瘍、女性排尿障害センター、小児泌尿器疾患、尿路結石(尿路結石センター)などの専門外来を中心に診療を行っています。腎移植の成績は世界トップレベルであり、10年生着率は90%を超えつつあります。泌尿器科チームとして150例近い腎移植を行っており、世界的にも有数の腎移植チームとして認められています。腎臓がんでは手術困難といわれたような患者さんに対しても高度の手術技術を駆使してがんの切除に成功しています。またこれら専門外来だけでなく前立腺肥大症、尿路感染症などの泌尿器科全般にわたる診療も行っています。前立腺腫瘍センターでは全例をダヴィンチによるロボット手術で、腎がんの部分切除も原則ロボット手術にて行っており、本年4月からは膀胱がんについてもロボット手術で行っています。放射線腫瘍科と協力して患者さんごとにベストとなる治療法を提示しております。また、進行したがんに対する免疫療法も行っており多様化した患者さんのニーズに対してベストオプションとなる医療を提供しております。常に時代の最先端を行く研究を行っており診療にもこれを反映させ世界的にもトップレベルの医療を提供しています。

腎臓小児科 Department of Pediatric Nephrology

当科は、先天性腎尿路疾患から腎炎・ネフローゼ症候群、そして急性・慢性腎不全まであらゆる小児期腎泌尿器疾患を診療しています。小児腎臓病診療には、さまざまな職種の医療従事者が力を結集して対応するチーム医療が必要不可欠です。当科は、東京女子医大病院内の腎臓病総合医療センターの診療科(泌尿器科、腎臓外科、腎臓内科、血液浄化療法科)や小児総合医療センターの診療科(小児外科、小児科、循環器小児科、新生児科)、さらに同病院内の種々の部門と緊密に連携できる環境に恵まれています。腎生検は年間約60～80例(固有腎20～30例、移植腎40～50例)行っており、高度で専門的な小児腎臓病治療として、腹膜透析導入を5～10例/年、維持血液透析導入を5例/年、そして腎移植を15例/年程度施行しています。血液型不適合例や巣状分節性糸球体硬化症といった、特別な処置を要する腎移植についても豊富な経験を有しています。それとともに、小児腎臓病の新たな治療法の開発につながる基礎研究にも力を注いでおり、さらなる診療水準の向上に努めています。

血液浄化療法科 Department of Blood Purification

血液浄化療法は、血中から人体に有害な物質（尿素・アンモニア・免疫複合体・過剰リポ蛋白、エンドキシン等）を体外へ除去し、重篤な病態の改善を図る治療法です。末期腎不全に対して血液透析、血液濾過透析、連続携行式腹膜透析、敗血症に対する血液吸着、免疫異常に対する血漿交換など多岐にわたる治療に取り組んでいます。透析ベッド 54 床、3 交代と大学病院に付属する透析室としては、最大規模で、透析室の常勤医師は 8～10 人、看護師 17 人、臨床工学技士は 28 人と豊富なスタッフをそろえています。我が国の透析の黎明期から先駆的な役割を担い、血液浄化療法全般の教育・研究施設として、日本国内だけでなく、海外からも見学、研修にきています。透析の診療実績では、年間に外来約 400 人、入院 1,200 人の透析患者さんがおいでです。新規の透析導入は 100 人超で、外来維持透析においての患者さんおよび他診療科の患者さんの問題点の discussion や診療方針の検討を行っています。さらに腎臓病総合医療センターの一員として、保存期慢性腎臓病の診療から、移植、医工学にもスペクトラムを広げて視野の広い医師、スタッフが集まり、さらにその育成に努めています。私たちはすべての腎関連疾患に対して集学的医療による克服を目指しています。

糖尿病センター Diabetes Center

糖尿病・代謝内科 Department of Diabetology and Metabolism

1975 年に糖尿病患者さんのトータルケアを目指して設立された、世界最大の糖尿病センターの内科部門です。糖尿病診療のサブスペシャリティ化を取り入れ、その統合した治療、チーム医療の先駆的取り組み、若年から高齢者まで一貫した、患者さん中心の糖尿病診療を行っています。

外来では糖尿病一般外来のほか、小児・ヤング、腎症（腹膜透析外来も含む）、神経障害、妊娠、フットケア、脂質異常症、肥満、神経障害などの専門外来があります。病棟では、糖尿病発症後間もない幼児から大人の糖尿病教育、糖尿病合併妊婦や透析導入、足壊疽治療まで、様々な糖尿病患者さんの治療を行っています。どのような糖尿病患者さんであっても温かくほっとしていただけるよう、医師、メディカルスタッフ一体のチーム医療で教育・治療、重症合併症に苦しむ患者さんに、全力を挙げて取り組んでいます。特に、糖尿病網膜症の手術治療のために糖尿病センター病棟に入院される際は、十分な内科管理の下に眼科医による治療が行われます。足壊疽治療にも他科と密着したチーム医療にて濃密な治療が行われます。他にはみられないユニークな総合的かつ多角的治療を行い、どんな多彩な合併症があってもすべてに対応して治療いたします。

糖尿病眼科 Department of Diabetic Ophthalmology

糖尿病センターの眼科部門であり、外来・病棟ともに内科と一体となり、網膜症、白内障、緑内障などの糖尿病患者さんの眼合併症の治療に取り組んでいます。

外来では、電子カルテとともに画像ファイリングシステムを導入して、蛍光眼底造影や OCT（光干渉断層装置）などの最新の検査機器のデータを瞬時に取り出して、詳細な病状を説明することができるようになりました。網膜症に対する治療も、ステロイドや抗 VEGF 薬の注射を併用する最新の治療法を積極的に取り入れています。特に、硝子体手術では、最新の照明装置や内視鏡を用い、生体への侵襲や患者さんへの負担が少ない、25 ゲージ・システムを用いた小切開硝子体手術を導入して、より安全で確実な手術治療を実践しています。

内分泌疾患総合医療センター Institute of Clinical Endocrinology

高血圧・内分泌内科 Department of Endocrinology and Hypertension

我が国有数の内分泌疾患総合医療センターの内科部門が高血圧・内分泌内科です。日本に4,300万人いる高血圧疾患と希少な内分泌疾患の両方を扱っています。高血圧疾患においては①高血圧になってしまった原因の精査、②家庭血圧や24時間血圧の評価、③全身の動脈硬化の評価、④薬物治療だけではない最新の高血圧治療の提供、を行っています。また、「脳卒中や心筋梗塞を決して引き起こさない」ことを目標に、血圧をコントロールするだけでなく、「高血圧を治し」一生の間薬を飲み続ける必要がなくなるための研究と治療を行っています。内分泌疾患においては、先端巨大症や悪性褐色細胞腫などの下垂体・甲状腺・副甲状腺・副腎・膵臓に発生する疾患や腫瘍が主な対象ですが、成長障害、骨粗鬆症、肥満症などの新しいホルモン関連疾患も、経験豊富なスタッフが診察しています。外来では、超音波検査室、荷重試験室を備えて高血圧と内分泌疾患の早期診断と治療に努めており、病棟では内科と外科が協力して治療にあたり低侵襲治療を実践しています。

乳腺・内分泌外科 Department of Breast and Endocrine Surgery

安全第一の診療を心掛けております。

乳腺の診療では年間約300人の乳がん手術を経験しています。超音波や乳管内視鏡検査を用いた早期乳がんの診断にも力を入れており、薬物療法や放射線治療などの集学的治療も関連診療科と協調しながら積極的に進めています。外科治療においては見張り(センチネル)リンパ節生検の結果に基づいて脇の下(腋窩)のリンパ節郭清を省略するなど先進的な医療を実施しています。整容性を重視した治療方針のもと、乳房温存手術をはじめ、同時再建手術を受ける患者さんも増えています。

内分泌領域では甲状腺や副甲状腺、副腎などホルモンを作る臓器の腫瘍やホルモン過剰症の診断と治療を専門としています。甲状腺がんの手術方針を決めるにはがんの進行度合いを見極めることが重要ですが、なるべく甲状腺のはたらきを温存する手術を提案しています。副甲状腺機能亢進症では摘出すべき病変の位置を正確に診断することにより完治を実現しています。副腎腫瘍に対しては腹腔鏡を使った、体に負担の少ない外科治療を基本としております。また、遺伝性疾患である多発性内分泌腫瘍症やまれな内分泌がん(甲状腺髄様がん、甲状腺未分化がん、副甲状腺がん、副腎がん、悪性褐色細胞腫)なども経験しています。内分泌領域の年間手術数は約300例です。

母子総合医療センター Maternal and Perinatal Center

母体・胎児医学科 Maternal-Fetal Division

母体の重症例を扱う総合周産期医療センターの中で、ハイリスクの母体・胎児の管理が可能なMFICU(母体胎児集中治療室)の分野を担当しています。重症例に対しては、関連各科と密接に連携しながら、内科的・外科的合併症を有する妊婦、前置胎盤などの産科合併症、また早産児出生・胎児異常が予想される分娩などあらゆる母体・胎児合併症に対応できる体制がとられています。

全ての分娩において高い満足度が得られるよう、助産師を含めたスタッフが一致協力して、診察にあたっています。麻酔科と協力して無痛分娩の要望にもお応えしています。さらに、母乳哺育の推進や育児相談にも積極的に対応しています。

新生児医学科 Neonatal Division

周産期医療のなかで、新生児疾患の治療を受け持ちます。早産児をはじめ、出生時の適応障害を起こした児、母体合併症の影響を受けた児、先天異常を有する児などの治療に対応できる新生児集中治療室(NICU)が整備されています。当NICUは全国的にも大規模な新生児医療施設で、総合周産期母子医療センターに指定されています。また、高度専門医療施設として、院内出生時および院外からの紹介症例に、24時間対応しています。一方で、比較的低リスクの低い新生児の生後の管理も行っています。新生児期は、人生のなかで一番不安定な時期ですので、出生後の適応現象に問題がないかを確認し、無事に退院の日を迎えられるように全力を尽くしています。

呼吸器センター Chest Institute

呼吸器内科 Department of Medicine

咳や痰、息切れや呼吸困難などの症状のある患者さんや、胸部X線写真で異常を指摘された患者さんの診断・治療にあたっています。近年の生活環境の変化や人口の高齢化から、気管支喘息、慢性閉塞性肺疾患(COPD)、肺がんなどが増加の一途をたどっています。当科では気管支喘息、COPD、肺がん、肺炎、間質性肺炎、呼吸不全、睡眠時無呼吸症候群など、あらゆる呼吸器疾患の診断、治療を行っています。呼吸器専門医が呼吸器外科医や放射線科医と密接に連携し、高度で安全・安心な診療を行う万全の体制をとっています。また、喘息管理指導、重症喘息に対する抗IgE抗体、抗IL-5抗体など分子標的治療や気管支熱形成術(サーモプラスチック)、禁煙外来、呼吸リハビリテーションなどを通じて予防医学・管理医学の充実を図り、在宅酸素療法や在宅医療など地域医などと連携を行っています。慢性咳嗽や喘息に対する呼気一酸化窒素濃度の測定やエコーF気管支鏡による診断にも力を入れています。

呼吸器外科 Department of Surgery

肺がん、転移性肺腫瘍、縦隔腫瘍、気胸、膿胸、肺嚢胞、漏斗胸などの呼吸器外科的疾患全般について呼吸器内科と連携して手術、診療を行っています。肺がん手術についてはその9割以上を低侵襲な胸腔鏡下に行っており、特に早期肺がんに対しては、標準術式である肺葉切除術の他に当科で開発したソフトウェアで構築した3次元画像を用いた正確な胸腔鏡下区域切除、亜区域切除を積極的に行っています。また転移性肺腫瘍の両肺多発症例では、部分・区域・亜区域切除を行い、肺機能を温存できる術式を選択しています。また、心疾患、腎障害、糖尿病、間質性肺炎などの合併症を持つ方に対しては根治性を考慮した縮小手術を、局所進行病変に対しては拡大手術を必要に応じ選択しています。悪性腫瘍による中枢気道狭窄に対し、気管支鏡下レーザー焼灼術、ステント挿入を行っています。

2012年より縦隔腫瘍に対して、2013年より原発性肺がんに対してロボット支援装置(Da Vinci sj/xi サージカルシステム)を用いた手術も導入し、多様なニーズに応えた診療を行っています。

膠原病リウマチ痛風センター Institute of Rheumatology

膠原病リウマチ内科 Department of Rheumatology

薬物治療を中心とした内科的治療を行います。免疫異常により発症する膠原病や関節リウマチは、生物学的製剤などの治療薬の進歩で、治療成績は著しく向上し、痛風も正しく治療すればほぼ100%コントロールできる疾患になりました。これらの疾患の我が国の診療ガイドラインは、いずれも当科の医師が中心となって作成されました。これらの疾患の多くは慢性疾患ですので、外来診療が中心ですが、診断時、急性期治療、合併症治療には入院していただき、適切な診療を行います。経験豊かな医師が若い医師を指導し、チーム医療を実践しております。数多くの治験・臨床研究も行い、最先端かつ最高水準の診療を提供できる体制を整えています。

整形外科(リウマチ) Department of Orthopedic Surgery

整形外科(リウマチ)は整形外科リウマチ班の外来部門です。整形外科(リウマチ)では国内最大規模となる毎年約300例のリウマチ性疾患の関節外科手術を行っており、リウマチ性疾患により侵されるほとんどの関節を治療対象としています。以前から膝や股関節の人工関節を積極的に行っていますが、近年は特に足趾や手指といった小関節の手術が増えています。足の外科では最近の関節リウマチ治療の成績向上に合わせ、関節修復まで考慮した手術方法を採用しています。また患者さんのニーズを踏まえ、全国的にはまだ数少ない人工足関節置換術も積極的に行っています。手の外科では人工指節関節手術や人工肘関節手術などに積極的に取り組んでいます。薬物療法で免疫抑制剤やステロイドなどを使用する関係上、感染ハイリスク症例に対する手術実績が豊富な施設でありながら、リウマチ患者に対する人工膝関節手術後の急性期の深部感染率は非常に低く、2017年末までの11年間804例で1例も感染に伴う急性期の人工膝関節抜去例が発生していません。

小児リウマチ科 Department of Pediatric Rheumatology

成人で発症するリウマチ性疾患（膠原病）の多くを小児も発症します。同じ病名でも成人とは病態が異なる場合があります、病名に“若年性”とつけられるものがあります。症状や治療の選択、今後の経過などが成人とは異なり、成長期ならではの配慮が必要となります。

小児リウマチ科では小児リウマチ性疾患・自己免疫性疾患（若年性特発性関節炎（JIA）、全全身性エリテマトーデス（SLE）、若年性皮膚筋炎（JDM）、混合性結合組織病（MCTD）、ベーチェット病、シェーグレン症候群、抗リン脂質抗体症候群）、血管炎症候群（高安動脈炎、結節性多発動脈炎など）に加えて家族性地中海熱、クリオピリン関連周期熱症候群（CAPS）、TNF 受容体関連周期性症候群（TRAPS）などの自己炎症疾患・周期性発熱症候群における先進的な診療を展開しています。当施設ならではの成人科と一貫した体制下で、成人期に向けた移行支援にも取り組んでいます。

遺伝子医療センター Institute of Medical Genetics

ゲノム医療を実現するべく、遺伝子医療センターは2004年5月に東京女子医科大学の附属医療施設として開設されましたが、今まで以上に患者さんご家族の状況に合わせたオーダーメイド医療の実現を目指し、総合外来センター内に遺伝子医療センター ゲノム診療科として新たに診療を開始いたします。2015年1月、米国のオバマ前大統領が国家戦略の柱の一つとして推進を表明した「Precision Medicine」で示したように、患者の遺伝子を網羅的に調べることで、個人ごとに最適な治療法を分析し、治療を実施する技術も急速に発展しています。臨床ゲノムセンターでのゲノム解析を元にこの医療の実現を目指すのはもちろんのこと、遺伝や遺伝子に関わる様々な相談に対応し、患者本人と家族への十分な遺伝カウンセリングとサポートをいたします。遺伝カウンセリングでは臨床遺伝専門医、認定遺伝カウンセラー、看護師、臨床心理士など多職種で関わることでより患者のニーズに合った医療を提供していきます。

女性センター Women's Center

女性科は、女性特有の器官や疾患、女性医師を希望する患者さん（女性）の診療を行う部門として平成30年5月に開設されました。いろいろな診療科の女性教授、准教授を主体としたスペシャリストの女性医師、メディカルスタッフにより、専門性の高い懇切丁寧な診療を行っています。

乳癌の早期診断、治療、化学療法、緩和ケアをはじめとする乳腺疾患の診療、大腸癌及びその他の大腸・肛門疾患の診断、大腸内視鏡検査、眼科疾患（ドライアイ、アレルギー）の診察、内科系疾患（ホルモン異常、更年期症状・月経不順の原因精査、不妊と甲状腺疾患、狭心症、不整脈、動悸、認知症、脳内科疾患、神経性やせ症、働く女性の健康管理など）の診察、遺伝学的検査の相談、心身医療の診察などを行っています。関連する各科と連携し、本学ならではの高度で心のこもった女性医療を推進しています。

救命救急センター Critical Care and Emergency Medical Center

当センターは、厚生労働省指定の三次救命救急センターです。東京消防庁、近隣県の消防署、他院からの三次救急患者さんを24時間365日、疾患を問わずに受け入れております。心肺停止状態、多発外傷、多臓器不全、脳血管障害、ショック、重症中毒など、緊急度が高く、重症度が高い患者さんが対象となります。高度先進医療と専門性の高い院内各科が揃っていますので、他科との連携により、特殊疾患やどのような基礎疾患をお持ちの患者さんの急変に対しても対応が可能です。センター内には、専従の救急医療専門医、集中治療専門医、外科専門医、脳神経外科専門医、整形外科専門医のみならず臨床工学技士、臨床検査技師もあり、急性血液浄化療法、体外循環、脳低温療法、高気圧酸素治療など、ICUでは、高度な集中治療を提供しております。ICU退室後の専用の一般病床も有しており、一貫した治療が継続できます。東京DMAT、日本DMATにも加入しており、事故や災害医療への対応も備えております。

がんセンター Cancer Center

高齢化社会の訪れとともに、わが国ではがん患者数が急速に増加していますが、21世紀型のがん医療は個別化を尊重する医療が中心になることが予想され、もはや医師個人や診療科単位での対応は困難です。がんセンターはこれまでも当院で脈々と行われてきた良質のがん医療を、さらに高い次元に推し進め、学内横断的ながん診療、がん研究へと発展させていくために設立された全学的な組織ですが、当院は最先端のがん医療の実践のみならず、がん患者さんやご家族にわかりやすく、より親しみのある全人的ながん医療の提供を心がけています。常に『患者さんのために何ができるか、どこまでできるか』という問いかけを持ち、基本理念である「至誠と愛に基づく全人的ながん医療」の実現に向けて、医師のみならず、看護師・薬剤師・臨床心理士・ソーシャルワーカー・管理栄養士など、様々な分野の専門職種がチームを組んで、全力でがん患者さんをサポートいたします。

小児総合医療センター TWMU Children's Medical Center

小児医療を巡る社会的ニーズの高まりに応え、小児関連診療科である、小児科、新生児医学科、循環器小児科、腎臓小児科、小児外科、脳外科小児グループ、心臓血管外科小児グループ、泌尿器科小児グループ、外科系関連科小児グループ、遺伝子医療センターによる横断的診療組織として2010年に設立されました。このセンターでは、関連する診療科が、その専門性を生かしながら、幅広い視点に立った全人的な総合診療を提供することを目的としています。これらの診療は、医師だけでなく、看護師、薬剤師、臨床心理士、理学療法士、管理栄養士、ソーシャルワーカー、病棟保育士、事務職など各専門職をメンバーとしたチーム医療で支えられています。

看護部 Department of Nursing

看護部では、外来受診される患者さんおひとりお一人が受診の目的を達成され、疾病とともにその方にあった生活ができるような支援やケアを提供しています。入院病棟では昼夜を問わず24時間365日最も身近な存在として、安全で安心できるような看護体制で対応しています。看護師長を中心に、担当看護師とチームメンバーが連携し、入院から退院まで継続して看護ケアを行っています。また、エキスパートナースや看護の専門性を発揮できる専門看護師、認定看護師が医師や他職種医療チームと協力し、患者さんにとって最も良い医療、良質で安全な看護が提供できるように活動しています。

薬剤部 Department of Pharmacy

薬は病気の治療にとっても大切ですが、必ずしも良いことばかりでは有りません。薬の良い面、悪い面、より効果的な使用法、気をつけなければならないことなど、薬に関するさまざまなことを患者さんに正しく知ってもらうことで、患者さんといっしょに安心・安全で質の高い薬物治療が行えます。薬剤部では患者さんの薬を調剤するばかりではなく、全ての患者さんに最適な薬物治療が提供できるように、さまざまな薬剤業務に取り組んでいます。市販されていない特別な薬の開発や調製を行う部門（製剤試験室）、抗がん剤など注射剤を無菌的に混合調製する部門（注射調製室）、入院の患者さんのベッドサイドで薬の説明や薬の適正使用を総合的に管理する部門（臨床薬剤管理室）、安全性情報や新たな使用法など様々な薬の情報を集めて病院内に情報を伝達する部門（医療品情報室）、調剤を行う部門などです。各部門が病院内の他の診療部門と連携を図ると共に、薬剤師が患者さんの身近な距離にいて、日々患者さんの薬物療法の安全確保と最適化に努めています。

中央放射線部 Department of Radiological Services

中央放射線部は、高度な画像診断と放射線治療を行うために、多くの大型放射線関連機器を揃えた我が国为数の放射線診療部門です。

現在画像診断のための関連機器は、320列MDCTを含む6台のCT装置、MR装置は3Tを含む6台、PET/CT、SPECT/CT・SPECT合計6台、心臓カテーテルなどの経皮的に診断・治療を行う血管造影装置は9台、他には乳がんの早期発見のためにマンモトーム、トモシンセシス等を装備した多機能透視装置などが稼働しています。

放射線治療については、高精度の強度変調放射線治療が可能なCT搭載のライナックなど3台、腔内照射装置とガンナイフ、10台を超える放射線治療計画装置が活躍しています。

近年急速に進歩する画像診断技術や放射線治療技術をいち早く取り入れて日常の先端医療に結び付けていくためには、中央放射線部の画像診断・放射線治療の専門医、診療放射線技師、医学物理士、専門看護師だけにとどまらず、各部門との連携が何より重要です。

あらゆる専門性を取り入れた“協調によるチーム医療”をモットーに、中央放射線部の診療体制を更に整えてまいります。

中央検査部 Central Clinical Laboratory

中央検査部は心機能検査、超音波検査、脳波・節電図検査、呼吸機能検査および内視鏡検査などを行う生理検査部門と血液、尿などの体液や分泌物に含まれる生化学的成分、免疫血清学的成分および微生物、血液細胞、尿中細胞などの形態学的検査を行う検体検査部門及び採血部門で構成されています。

当部は総合外来センターに位置し、患者さんが安心して検査を受けられるよう患者サービスに努めるとともに、各検査分野での認定資格の取得等に力を入れて専門性の高い技師育成に努め、より質の高い検査データの提供を行っています。さらに、検体検査においては診療前検査における検査項目を充実させ、迅速な検査結果の返信により、診療部門の診断・治療を遅延なく行うための重要な役割を担っております。検体検査室および生理検査室は、国際標準化機構の国際規格ISO15189を取得しています。

輸血・細胞プロセッシング部 Department of Transfusion Medicine and Cell Processing

血液成分の不足があり、他に代替する治療法が無い場合に、足りなくなった血液成分を不足分だけ補うのが輸血療法です。当部では献血から製造される血液製剤を赤十字血液センターから取り寄せ、適切に管理すると共に、血液型・交差適合試験などの輸血検査を実施し、手術室・ICU・病棟に供給する部門です。他の医療機関では薬剤部が取り扱うことの多い、アルブミン・免疫グロブリンなど、血漿成分から製造されるすべての血漿分画製剤の管理供給も行い、特定生物由来製剤全般について、適正使用や医療安全を推進しています。当部採血室では、当院で治療を受ける患者さんから手術に使用する自己血採血を行います。また、悪性腫瘍に対する造血細胞移植や免疫細胞療法を実施するための成分採血を行い、一部は細胞プロセッシングセンター(CPC)で細胞成分の調製や活性化培養などを行います。さらに術中出血量抑制目的にクリオ製剤調製、輸血関連免疫学的副作用予防のために洗浄血小板調製、また難治性腹水に対する腹水濾過濃縮処理などの業務で診療を支援しています。その他、全国の先天性溶血性貧血や赤芽球癆などの難治性稀少疾患診断のための特殊検査も受託しています。

臨床工学部 Department of Clinical Engineering

病院にはさまざまな医療機器があります。それには輸液ポンプやシリンジポンプなど、多くの患者さんに使用されるものから、人工呼吸器、透析装置、人工心肺装置や補助人工心臓など高度で専門性の高いものまであり、多岐にわたっています。臨床工学部はそれらの医療機器を、患者さんが、いつでも安全に安心して使用できるように、日頃から保守点検を行うとともに医師、看護師らと連携し、チームの一員としてそれら进行操作する業務を担っています。現在、64名の臨床工学技士が在籍し、ME機器管理、血液浄化、人工心肺、カテーテル、手術、集中治療などの領域で診療支援をしています。

栄養管理部 Nutrition Support Unit

栄養管理部では、入院中のお食事の提供、栄養サポート（NST）活動を通して、病態・症状に応じた栄養管理を実施しています。自宅においても食事療養が可能となるよう、入院はもとより外来患者さんへの具体的な食生活の相談・指導も行っています。「食べること」を大切に考え、患者さんの適切な栄養管理を支援するため日々研鑽に努めています。

社会支援部 Social Support Department

社会支援部には、退院調整看護師 / ソーシャルワーカー / 地域連携担当者が所属し、患者さんやご家族の安心につながる療養環境の支援と、地域の医療・福祉機関の相談窓口として、活動を行っています。これからも各職種の専門性を発揮し、一層取り組んでいきます。

地域連携について

当院と地域の医療機関やかかりつけ医の先生方との連携の窓口として、外来診療やセカンドオピニオン外来の予約、診療情報提供書の発送業務を担当します。また、地域連携のクリティカルパスの窓口を担当します。

福祉／制度について

傷病によって生じる心理・社会的問題、経済的問題にソーシャルワーカーが担当し、社会保障制度・福祉制度等の紹介、就労・就学等の相談に対応致します。患者さんやご家族にとって安心な療養環境や社会生活となるよう取り組んでいきます。

退院調整について

診療科の医師・看護師と連携し、退院に向けて医療処置の簡便化を図り、病状と介護力に応じて、介護サービスの調整や在宅医療の医師・看護師と連携を図ります。

医療安全推進部 Department of Patient Safety Management

医療安全推進部は、2017年9月に従来の「医療安全対策室」から機能を拡充させるために部に昇格しました。また、「安全対策」から一歩進めて「安全推進」という取り組みを強化するために、名称も現在のように変更しました。東京女子医科大学病院は、医療安全に関する大きな課題を背負っていて、他の病院より一段も二段も高いレベルでの取り組みが求められています。そのため、2016年には「医療安全科」を新たに創設して、医療安全を担当する専従医師を確保し、また専従の薬剤師も配置して人員体制を強化しています。現在では、医師1名、看護師3名、薬剤師1名、臨床工学技師1名、臨床検査技師1名、事務3名の計10名の専従・専任職員で構成され、人員体制の面では相当に強化されました。そして、インシデント報告システムに基づいた再発防止策の検討・実施と共に、チーム医療の推進に向けた研修会などを企画して、院内各部署の協力を得ながら「安全文化の醸成」に努めています。最近では、説明と同意の充実にも取り組んでいて、信頼関係を基礎として患者さんに安全・安心な医療が提供できるよう支援しています。

総合感染症・感染制御部 Department of Infection Control

病院に来られる患者さんは、感染症であったり、病気や治療の影響で感染しやすくなったりしておられます。そのため、病院内では、微生物の検出状況を常に把握し、感染の発生や拡大を防止し、感染症患者さんの治療を適切に行うことが重要です。当院では、院内感染対策委員会を組織して感染対策を推進していますが、総合感染症・感染制御部はその中心であり、専門の医師、看護師、薬剤師、臨床検査技師が活動に従事しています。感染症の検査と治療法に関する助言や、必要な感染対策への支援などを行って、患者さんが安心して診療を受けられる病院にしたいと努力しています。

臨床研究支援センター Intelligent Clinical Research and Innovation Center (iCLIC)

臨床研究支援センターは、治験（企業依頼・医師主導）のサポートのみならず、早期探索的研究も含めた臨床研究（多施設共同、自主研究など）を活性化させることを目的としています。当センターには臨床研究部門、研究資材管理部門、教育・研修部門があります。

治験等の事務手続きや試験コーディネーターによるサポートを行う臨床研究管理室、プロジェクトマネジメント室、生物・統計データ管理室による研究の立案から実施、データ解析等の支援、試験薬管理室、試験医療機器管理室等、専門性をもった管理・運用、出口戦略までを見据えた臨床研究体制をとっております。

今日の科学を明日の医療にするために国際水準で質の高い臨床研究への更なる貢献を目指しています。

からだ情報館 Patient's Library

「からだ情報館」は、病気やからだについてのさまざまな情報を調べ、学んでいただくことを目的とした場所です。外来患者さんだけでなく、ご家族やご面会の方々、どなたでもご利用いただけます。館内では医学辞典やわかりやすい医学書、一般向けの医学雑誌を閲覧したり、医療関係のDVDを視聴することができます。インターネットを利用して、医療の最新情報を探すこともできます（※インターネットのご利用は医学情報の検索・収集のみに限定しています）。

図書や雑誌などの資料の貸出は行っておりませんが、ご自由にお持ち帰りいただける医療に関するパンフレットを種々ご用意しております。

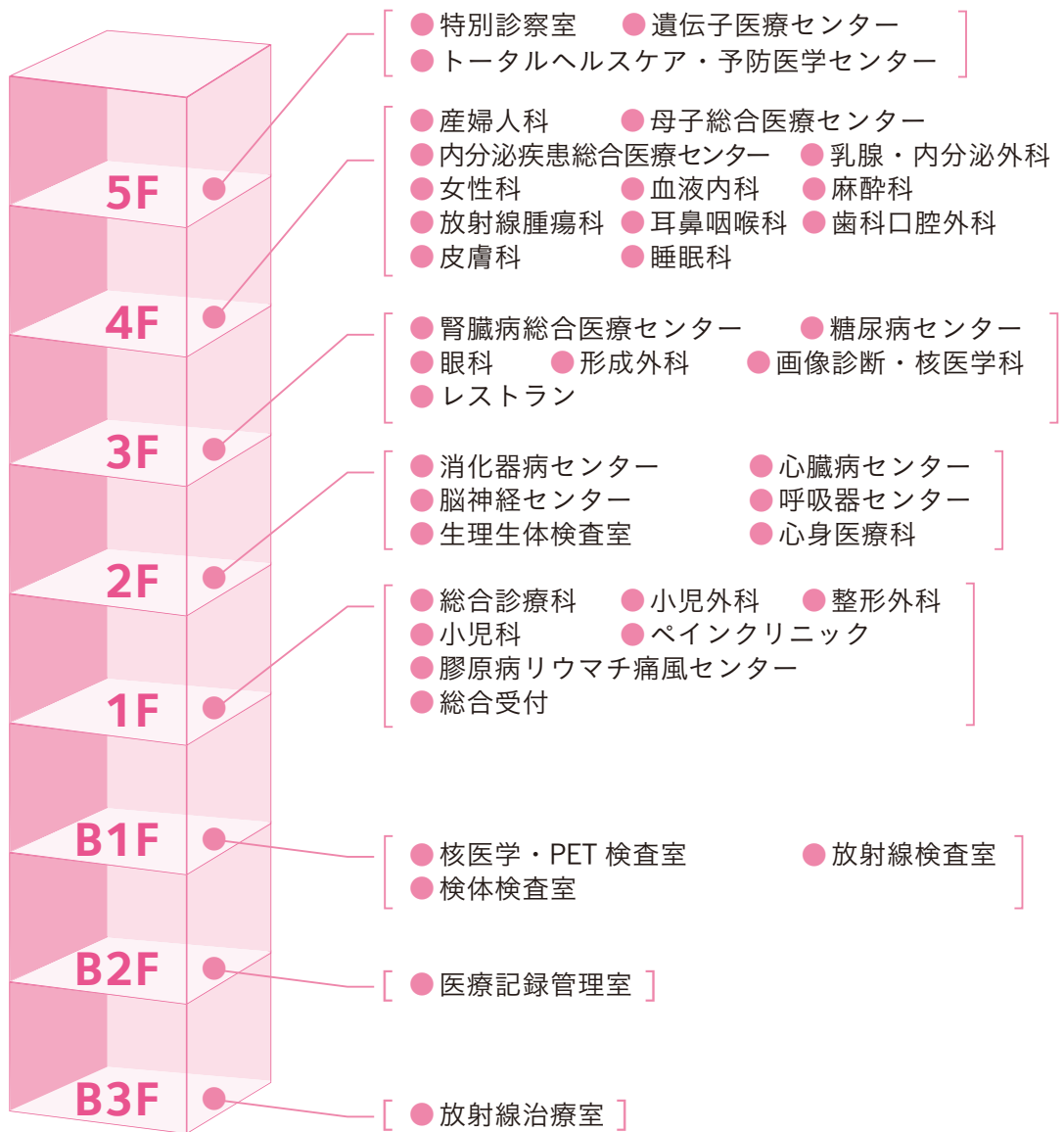
知りたい病気についての情報が、どんな医学書に載っているか、どのような資料があるか、ご相談いただければ、当館スタッフが一緒にお探しいたします。また、当館の一角にある“がん情報サロン”では、疾患別のがん情報や治療に伴う副作用への対処法、患者会の情報が閲覧できます。定期的に看護師や薬剤師によるミニレクチャーも開催しております。どうぞお気軽にお立ち寄りください。

最新の情報はホームページをご覧ください。

外来案内

平成 30 年 5 月現在

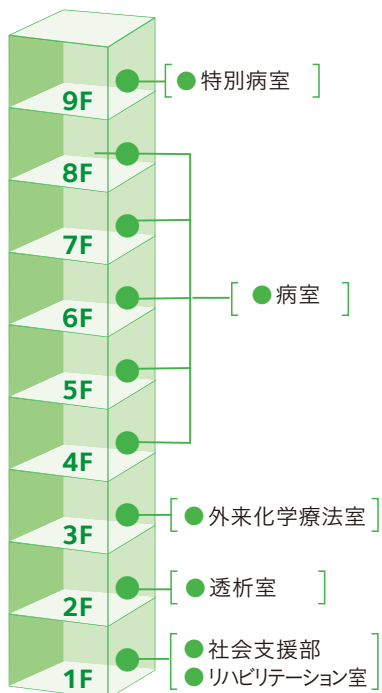
総合外来センター



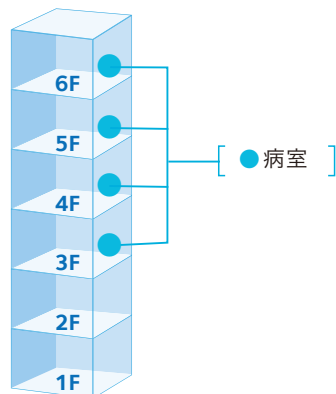
病棟案内

平成 30 年 7 月現在

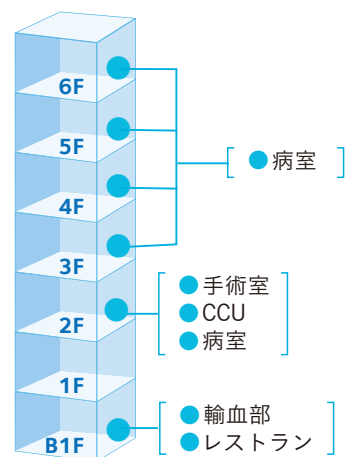
第 I 病棟



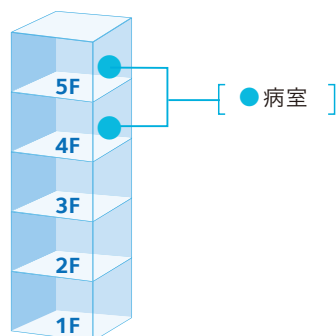
西病棟 A



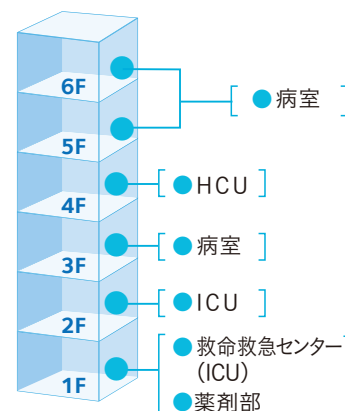
西病棟 B



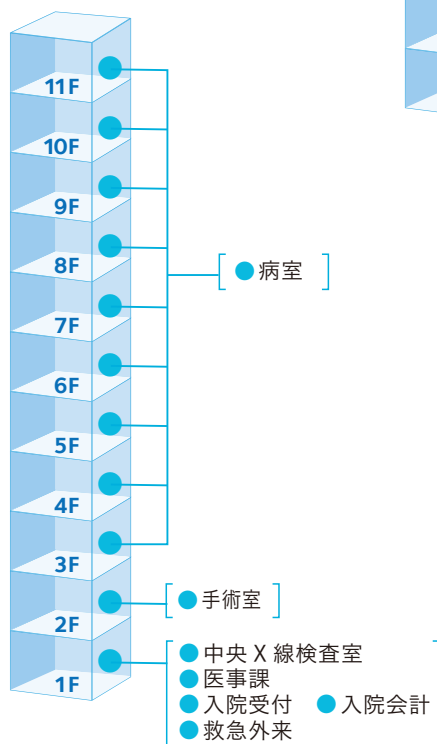
糖尿病センター



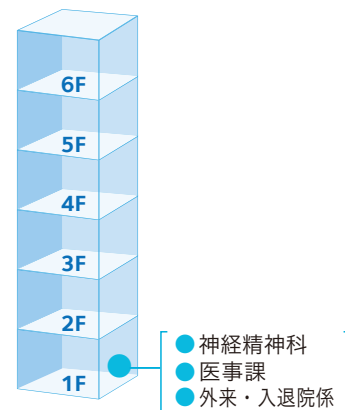
東病棟



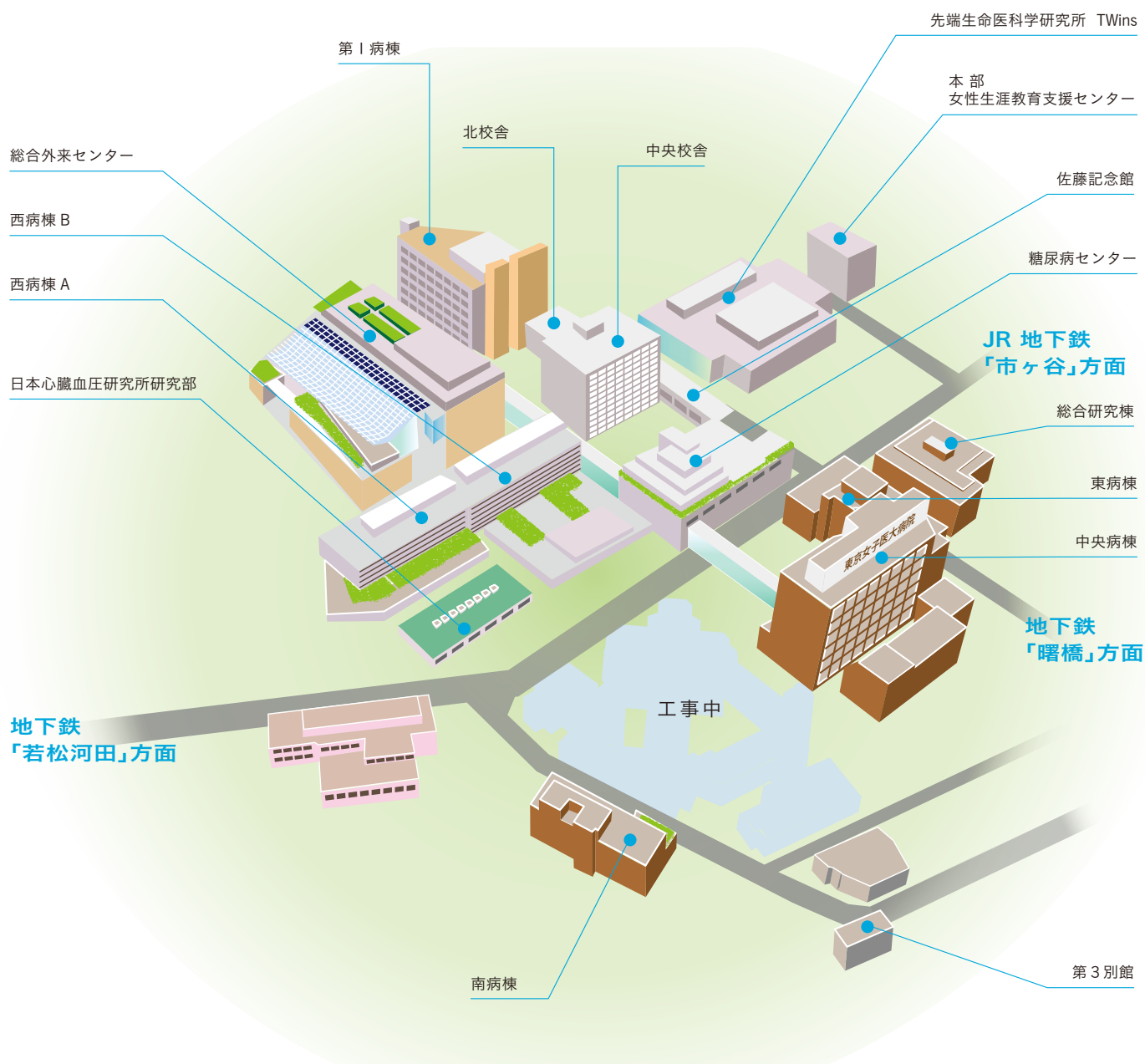
中央病棟



南病棟



構内見取図



東京女子医科大学附属施設

- **東医療センター**
〒116-8567 荒川区西尾久 2-1-10
Tel:03-3810-1111
- **附属東洋医学研究所**
〒114-0014 北区田端 1-21-8
NSKビル3階
Tel:03-6864-0821

- **附属八千代医療センター**
〒276-8524 千葉県八千代市
大和田新田 477-96
Tel:047-450-6000

- **附属成人医学センター**
〒150-0002 渋谷区渋谷 2-15-1
渋谷クロスタワー 20・21階
Tel:03-3499-1911

ご案内図



◎ 地下鉄

- 都営大江戸線 …… ② 若松河田駅 下車 (若松口より徒歩約5分)
- …………… ③ 牛込柳町駅 下車 (西口より徒歩約5分)
- 都営新宿線 …… ④ 曙橋駅 下車 (A2出口より徒歩約8分)

◎ 都営バス

- 宿74系統 …… ① 新宿駅西口 → 東京女子医大前
- 宿75系統 …… ① 新宿駅西口 → 東京女子医大前 ← ⑧ 四谷駅前 ← 三宅坂
- 早81系統 …… 早大正面 → ⑤ 馬場下町 (早稲田駅) → 東京女子医大前 ← ⑥ 四谷三丁目 ← 千駄ヶ谷駅前 ← 原宿前 ← 渋谷駅東口
- 高71系統 …… ⑦ 高田馬場駅前 → 東京女子医大前 ← ⑨ 市ヶ谷駅前 ← 九段下

東京女子医科大学病院

〒162-8666 東京都新宿区河田町8-1 Tel : 03-3353-8111 (代表)